

集落移転に伴うコミュニティの変容に関する研究

五島列島のカトリック集落「折島」を対象として

高地可奈子

1 研究の背景と目的

五島列島に多く存在するカトリック集落は、近世、隠れキリシタンの長崎本土からの移住を起源とし、その中でも明治初期のキリスト教禁制の撤廃後、名乗り出てカトリックとなった集落である。それらは隔絶性の高い所に立地し、斜面に段々畑をもつ独特の村落景観を創り出している。本研究の対象地であるカトリック集落『折島』は、五島列島中通島の西方に浮かぶ島であり、1976年に中通島青方の町営住宅『折島団地』への集団移転を機に、150余年の歴史を閉じた集落である（図1）。

本研究の目的は、移転により失われた折島集落の空間、コミュニティの復元、集落移転の経緯の検証と、移転後から現在に至るまでの団地における生活空間の実態を明らかにすることによって、折島のコミュニティ及びその変容について考察することである。その際、生活レベルの事象に視点をおき、一社会現象としての集落移転の持った意味を問うこととする。尚、本研究は、2001年10月から2002年11月にかけて行った現地実測やヒアリング調査に基づくものである。

2 折島集落の概要

2-1 折島集落の空間構成

折島は、東西400m南北1km面積0.32k㎡の島で、南北に並ぶ2つの山で構成されている（図3）。最初に居付いたのは4,5軒といわれ、人々は険しい地形を開墾して畑を作り、集落を形成してきた。しかし、当初折島は浜ノ浦の地主のものであったので、1880年に住民13名が共同で買い上げた。島の人口は最大の1960年で230名、移転時の1976年には世帯数は23戸、人口112名であった。

折島は、西側が海からの強風に晒されるため、家や畑は島の東側に混在している。居付き当初、家々は距離をもって散在していたが、世代の移り変わりの際に起きるイエワカレ（隠居分家慣行など）により、小さなイエ群が出来ていった。島には、南北に延びるミチが東海岸沿いにあり、このミチから各家までは細い山道がつながっていた。

図2は1965年頃の地籍集成図より、土地所有の境界

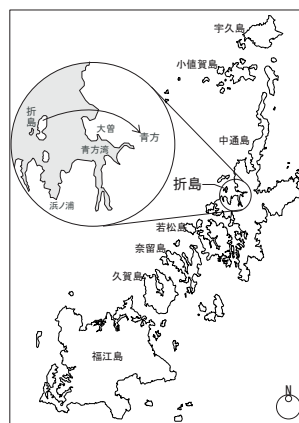


図1 五島列島の中の折島



写真1 耕地の展開



写真2 教会のある島の風景

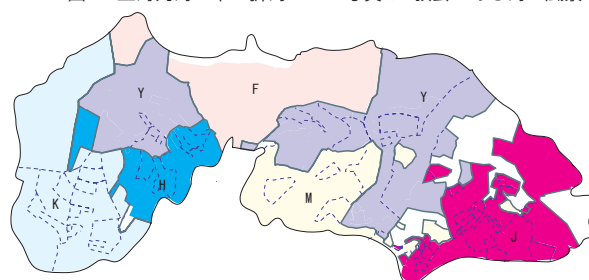


図2 折島・血族による所有の状態

を示し、更に血縁関係によって塗り分けた図である。この図から、土地はかなり細分化されているが、実は血族による領域が形成されていることが判る。また、集落形成初期段階にみられた、一人の土地所有者が宅地、畑、山という全ての構成要素を持つことによる領域的な完結性は、時代が下り、世代交代が進むにつれて崩れていった。つまり、折島集落は集落域が島の大きさで限定されるため、当初行われていたような土地の均分相続は継続できなかったといえる。その際、特に生活に関わる畑のみが相続の対象となったため、畑は細分化が進み、時には個人が飛び地的に所有することもあった。

教会は、島の中央に位置し、山道を登り詰めたところの尾根に建っているため、島のどこからでも見え、折島の象徴的な空間を創り出している（写真2）。

2-2 折島集落の生活

島の生活に船は欠かせないものであった。折島教会では月に1,2回神父が折島にやってくる時だけしかミサが行われなかったので、



写真3 郷の伝馬船



写真4 折島教会

毎日曜には近くの大曾教会まで皆で伝馬船を漕いで行っていた。買い物に行く時は伝馬船を相乗りしていた。小中学生は渡海船で通学し、学校から帰ると伝馬船で釣に出たりもした。

信仰活動は生活に密着しており、子どもは毎日のように教会横

の稽古部屋で公教要理の勉強をしていた。また、2度目の折島教会建設の際には、住民全員によるキビナ漁でその建設費を賄ったということからは、信仰活動を介した住民の結束性をうかがわせる。

折島は、慢性的な水不足による苦勞が絶えなかった。島の主なミチ沿いには、水源である5つのカワ(湧水)があった。水汲みの時には山がちなミチを何度も往復しなければならず、夜中の作業になることも多かったため大変な重労働であった。また、他集落から船で運んでくることもあった。水道は1967年に漸く完成した。電気やガスに関しても折島は中通島本島よりもその普及が遅く、長い間、薪や灯油の生活をしており、子どもも一生懸命手伝いをした。「風呂の水波んだり手伝いしてたし、ジミという灯りは暗くて勉強も出来なかった」と、ある住民は子ども時代を振り返った。

折島近海はかつてから好漁場で、戦後直後までは盛んに漁が行われていた。中学生は、天気の良い日には学校を休んで親の手伝いをしていたという。夜は遅くまで餌の準備をして、朝は早くから漁に出るので、「ね

むと一て」船から落ちてしまったというエピソードもある。漁で捕った魚は、自分たちの食料にしたり、漁協や仲買業者に売ったりして生計を立てていた。1960年代からは現金収入を求めて多くの人が巻き網船に乗るようになった。巻き網船に乗ると3年で家が建てられたと言われる時代で、折島では、中学卒業後、高校に進学する人はおらず、「迷わず巻き網船に乗った」という人が多い。また、高度成長期には、特に女性が集団就職で地方都市に出ていった。

男性が漁業で現金収入を得る一方で、女性は自給のための農業をしていた。稲作が困難な土地のため、畑でイモや麦、野菜を作っていた。食べ物は、これらの農作物や海で捕ってきた魚介類ばかりであった。

折島の生活は、食べ物が特別豊富にあるわけでもなく、苦勞も多かったが、「いい生活だった」という人が多い。「折島は不便だったけどそれが日常だったから」というある住民の言葉は、特に印象的であった。あらゆることが、直接生きていくことにつながる生活で、他に選択肢があるわけでもなかったが、そこには何にも縛られることのない自由があったのではなかろうか。「海に囲まれているから視界が広がった。空気もきれいで別天地みたいな感じだった」という言葉からは、折島集落が他集落とは海を隔てたところで、魅力ある共同体を形成していたことを読みとることが出来る。



写真5 浜

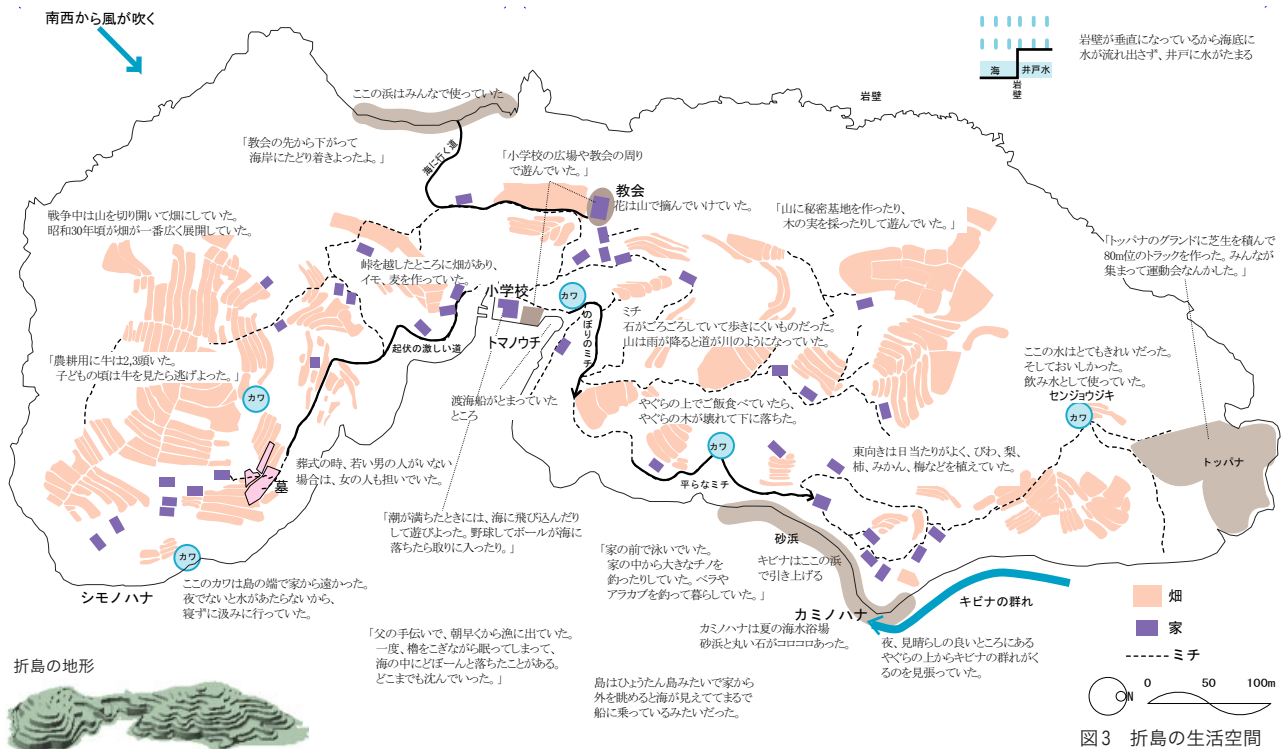


図3 折島の生活空間

3 折島集落移転の経緯

3-1 背景

移転の10年程前から折島の人口は急減し、人の通らないミチや畑は荒れ始めていた。若い男性のほとんどは巻き網船に乗っているため普段は家を空けていることが多い上に、島には老人が多かったため、急病人が出た時などはその対応が大変だった。また、1966年に折島分校は廃校となり、子どもは船で通学しなければならなくなった。そんな状況で、1970年『過疎地域対策緊急措置法』が制定されたことにより、過疎化が進む折島に移転の話が浮上した。

3-2 話し合いから移転実行まで

移転の話し合いは、移転の4,5年前から始まった。移転の話を持ちかけたのは小学校の先生であったが、移転を希望する住民が申し出たことによって町との交渉が始まった。話し合いは月に1度、巻き網船漁師が島に戻って来る月夜間に行われ、決定までに何十回と繰り返された。移転に対する意見は、人によって様々であったが、特に世代ごとに意見が分かれた。老人の中で初めから賛成した人はおらず、移転に賛成する若い人はそれぞれの親を説得したという。最終的には多数決で移転が可決された。

移転の理由としては、慢性的な水不足に悩まされていたこと、子どもの教育と将来のことを考慮したこと、急病人を運べる人がいなかったことなどが挙げられる。これらの理由で積極的に移転に賛成した人もいるが、中には、国の事業なので反対しても無駄だと判断し、消極的に賛成という形をとった人もいる。ずっと反対していた人も、村八分にされたら嫌だからと最終的には承諾の判を押した。町の立場としては、このまま島に人が住み続けることになることとインフラ整備にコストがかかるが、移転であればお金もかかるが国から補助金が出るということが、移転推進の理由であったと考えられる。五島はこの時期、折島の他に少なくとも5つの集落移転が行われている。折島は、移転が決定した1年半後の1976年3月末に移転が行われた。

3-3 「上五島洋上石油備蓄基地」の建設

折島集落の移転が行われたわずか1年後、折島沖に石油備蓄基地を建設するという計画が浮上した。建設の為に、青方湾の漁業権に加えて折島の土地所有権が必要であったため、折島住民はこのとき折島の土地を手放すことを要請された。漁業権放棄とその補償金額をめぐって、上五島の漁民は開発側と5年の歳月をかけて闘い新聞を賑わした。この時、同じ上五島町の漁民である折島団地の住民が関心を向けたのは、漁業



写真6 青方湾に浮かぶ石油備蓄基地と折島
写真7 折島(左)石油備蓄基地(右)

権放棄の問題ではなく折島土地買収問題であった。

移転時と同様、土地買収の際にも住民の間で意見は割れ、国や役場、事業者との交渉は難航した。「先祖の苦勞の血が流れとる貴重な島。町は島の人の気持ちを分かかってなか」という反対者。「基地が出来ても折島が消える訳でもなか」という賛成者。移転時にも土地買収の話はあったがその時は住民の反対で流れている。国が提示した土地の値段は移転時のそれとは比較にならないほど上がっていた。この計画は移転後に浮上したものであるが、「町は基地建設のために住民を騙して移転させた」と思っている人も多い。結局全ての土地を買収することにはならなかったが、1988年、石油備蓄基地は完成となった。

4 移転後・折島団地での生活

4-1 折島団地初期計画

折島団地は、中通島青方の中心地近くの山の斜面を切り開いた所にある。団地の規模は折島集落と比べてとても小さく、図4からは島に点在していた家々が団地では1カ所に集められている様子が判る。自らの手で山や畑を整地し石垣を積んで作り上げた折島の宅地とは違い、団地は人工的に切り開かれた、殺風景な宅地である。家族の人数によって4つの住宅タイプのいずれかが割り当てられ、場所はくじ引きによって決められた。折島では血族によるまとまった領域の中で生活していたが、団地ではそのような現実とは無関係に家の場所が決められようとしていた。そこで住民は、くじ引きの後に親子・兄弟が隣同士になるように同じ住宅タイプの人同士で場所の交換をした。また、住宅は12年後に払い下げられる契約であった。

4-2 住空間の変容

住宅は移転当初全23戸で、現在は新たに住宅3軒と集会所が加わっている(図5)。移転から四半世紀経った今、折島団地は住民の手が加わって生活感あふれる環境になっている。敷地境界には塀がなかった為、住民自身が塀を作った。その際、近い血縁関係にある家々の間には設けず、それぞれの血縁領域を囲むように作った。また、約半分の家が庭に畑を作ったり増築をしたりしている。これらの増築は、払い下げられる

前に町から許可をもらって行われたものが多い。増築の主な理由としては、子どもの成長で家が手狭になった、また、子どもが結婚して親が隠居するためというのが挙げられる。団地の限られた敷地内においても、島で行われていた隠居分家慣行が引き継がれた。

4-3 折島団地の生活

「団地での生活は楽ではあるけど、お金なしでは通らない」。団地での生活は、水にも病院にも困ることがない。学校へは徒歩や自転車で行けるようになった。食べ物も何でもお金を出せば買える。この便利な生活は、自給自足の現金がいない折島での生活とは正反対である。徒歩で行ける最寄りの教会では毎週ミサが行われる。その教会は折島住民だけの教会ではないため、教会を通して住民のコミュニティ範囲は広がったが、それは自らが主体的に構成すべきものではなく、既にあるものに参加すれば成り立つものに変った。折島では結婚式の時は島中の人が集まり、年始は全戸を廻って挨拶したりしていたが、団地では結婚式も親戚だけで行い年始の挨拶回りもしなくなった。皆が助け合わなければ生活できなかった折島にみられた結束性は、個人で何でもできる団地では薄れていったといえる。また、閉ざされた孤島の世界から、既に出来上がっているまちの一角への住環境の変化は、住民の集団意識に何らかの影響を与えたとはいえない。

巻き網船漁業をしていた男性は、移転によって職を変えることはなかった。一方、女性の日常の仕事であった農作業は、畑を失ったために継続できなくなった。しかし移転後まもなく、住民は団地そばの荒れていた土地を無償で借り、自ら開墾して再び畑を獲得した。今は生活のためというより趣味としての農作業は住民同士のコミュニケーションに役立っている。

就学前の子どもは団地の道路で自転車に乗ったり縄

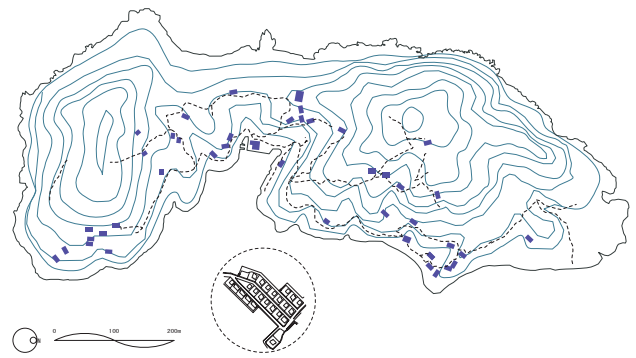


図4 同スケールの折島と折島団地

跳びをして遊んでいる。折島の子どもの折島でしか出来ない遊び、経験をしていたことに比べて、団地で遊ぶ子どもの姿は日本のどこでも見かける光景である。

5 まとめ

かつて折島集落で、人々は信仰を中心とした結束あるコミュニティの中で生きていた。島と団地では、環境が大きく変化し暮らしも変わったが、島を懐かしむ住民にとっても、どちらの生活が良いかどうかを測ることは難しいことであった。今、人の住まなくなった折島は山と化し、30年前とは全く違う姿となっている。折島に存在していた生活共同体も、もはや過去のものとなった。社会の変化が環境を変え、環境は社会とともに人々の暮らしに影響を与え、一方で人々のあり方が社会と環境を動かしていくという事を、折島集落移転という一つの出来事は、端的に物語っている。

折島団地住民は、移転という特殊な経験をしたことにより、これまで無意識のうちに営んでいた折島での生活を改めて見つめる機会を得たと考えられる。折島住民が移転により得たものは、日本のどこにでも見られる平均的な生活だったといえるが、今、住民はそれぞれの記憶する折島で築いてきた歴史に基づいて、自分たちの生き方、あるべき姿を定義し、それを継承しようとしている。

↓既存住宅 ↓増築



写真8 玄関も構えられた増築



写真9 庭先の檜に干すカンコロ



写真10 畑で作業する人々



写真11 団地の道で遊ぶ子ども

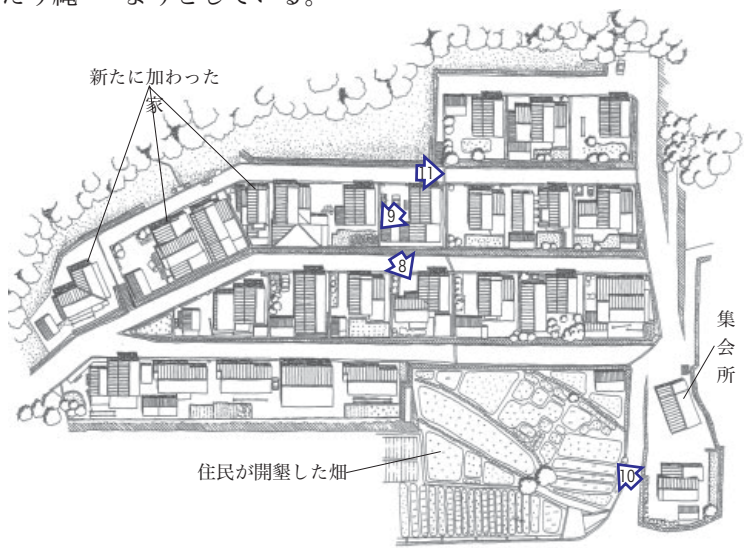


図5 現在の折島団地